

せ た か む い

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館
第171号・平成15年12月1日
84212590

年表で読む

古平の歴史

《77》

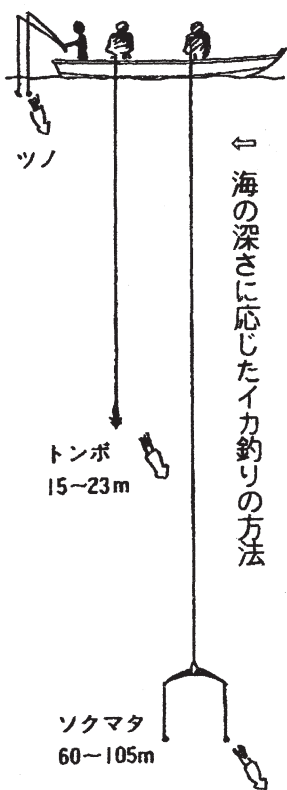
古平のイカ漁

■イカ釣りの移り変り

1. 明治時代の初め頃から小型の無動力船に一〜七人が乗り、船が漂流しないように錨(いかり)を下ろし、それぞれの地の先の沿岸で行われていた。
2. 大正時代の中頃から乗組員が一〇数人の動力船が使われるようになり、漁場は道南地方が好漁場となった。
3. 昭和一五年頃以後ほとんどが動力船になり、乗組員も多くなった。漂流しながら釣るようになったので漁場の範囲が広がってきた。
4. 戦後の食料不足などもあり、イカ釣り船が急増した。
4. 昭和五〇年頃

海外の漁場へも進出するようになったが、二〇〇海里問題から各国の漁獲制限が厳しくなってきた。

← 海の深さに応じたイカ釣りの方法



■イカの漁獲高

古平でのイカの

漁期は、明治四五

年当時は七月一〇

日から九月一〇日

までで、生産高は、

生売り

数量 九六〇貫(三三六ト)

金額 一四四円

製品原料

一七三・九二貫(六五ト)

金額 二〇・八六九円

イカのほとんどはするめ(鰯)

に加工され、するめ二〇枚を一

把とし、七五把(二五〇〇枚)を

一梱(三)として、これが売買の

単位でした。

明治四五年のイカの製造は、

するめ 二九・一八九貫

一六・〇〇〇円

塩辛 五〇樽(二樽の重量

は不詳)・金額 二六八円

イカ釣り漁業者は、明治四四

年は一五九人、大正元年になる

と二四四人と大幅に増えたが、

漁獲高を見ると好不漁の波が大

きく、大正一四年は九五・〇〇

〇貫(三五六ト)を超える漁獲が

あったが、全国的にコレラの

捲取りリール



ハンドル

山手(やまで)古平で言う(とんぼ)を引き揚げる動きを、そのまま機械に応用した初期の手動式イカ釣り機

流行があったりして価格は下落し、翌一五年は七・六〇〇貫と、前年の一割にも満たないという不漁でした。

ヤリイカは鰾網やコウナゴ網、大謀網などにも掛かり、明治四五年の記録では、一三六八〇貫(約一〇ト)の漁獲があり、生売りで六七〇円の売り上げがあったとあります。

イカは、古平の漁業全体の生産高から見ても少なかったのか町の要覧などには統計がなく、昭和一一・一二年によくするめの産額が出ていますが、その後、統計に表れたのは戦後になってからです。

(※明治三〇年代からのイカやすめるの生産統計などがありますが、統計資料によってかなりの違いがありますので、統計は略しました)

大正一一年

▼一〇月五日

この日、小樽を六時三〇分発の汽車に乗り込む。余市での用向きを済ませ、一一時頃、陸路をわらじがけで帰途。出足平（白岩）、島泊湯内（豊浜）の得意先に寄る。カレ網、刺網類を売り込めると思っていたが、まだ男連中は仕事で家に帰っていない。漁場や山へ行っている人が多い。我々の商売はこれからだ。今日は（文字不明）ということ。どここの家でもダンゴを作っていて馳走になる。帰ったのは四時。子供達も七日ぶりに会ったので大喜びだ。夜④で部落会集まりがあるので行く。

▼一〇月六日

起床七時。天高く馬肥ゆ、実は一年中で気持ちのよい時だ。留守中の帳簿調べなどをする。午後銀行へ行き預金。帰り田へ寄り話をする。ヨに寄り預り物を渡す。

▼一〇月七日

昨夜から雨が降り、午後から本降りになる。父は井戸枠を湯内石にするというので石屋に行

く。店は閑散だ。明日、妻はマサさんの縁談のことで秩父別へ行くことになっていたので、その支度をしている。東洋製網から網の値段を知らせてきたので、安いので二万間を電報で注文する。夜、一〇時頃、承知したと返電が来る。札幌、釧路の市議選は憲政党が大勝利、ほかの都市でもよい成績だ。小樽二級選挙は明日の新聞でわかる、どうなっ

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【72】

たのか早く知りたい。

▼一〇月八日

小樽市議選二級如何と、朝早く新聞を見る。二級は憲政会の勝利。岡崎主人もめでたく当選した。朝九時の富丸で妻は悦三を連れて深川へ行く。大謀漁は本年は一向に振るわない。殊に東京のコレラのためマグロは大暴落。市況は沈滞している。改良網は大謀を見込んで二〇〇丸程も手持ちがあるが、この分だとうなることやら。山本店から

約束の網八六を八一にすると手紙が来た。当方から、八〇に頼むと手紙を出したのと同じき違いになったようだ。

▼一〇月九日

曇天、毎日の雨で道路も悪い。積丹から知り合いの船頭の船が来ているので、リングをやるべく浜へ行ってみた。時化で今日も出られぬという。美国行きの馬車があつたので、西洋ナシや

リングなど⑤へ進呈するべく

積んだ。父もこのころは調子がいいとかで、わらじがけで農園へ行く。六号と七号、桐沢と売約をした。本日までリング五三〇円程売り上げた。値段の高い年だと千円にはなるのだが残念なことだ。八時頃戸外に出て見る。星は中天にキラキラしている。明日は天気になってくれればいいが、妻と悦三は秩父別に行っているが、明後日には帰るだろう。

▼一〇月一〇日

起床七時、朝夕ずい分と日が短くなったのが感じられる。九日付けで、深川にいる妻から手紙が届く。出発した日に悦三が船に酔って、泣いて困ったとのこと。そして小樽と岩見沢で乗り換え、八時半ころ着いたという。一晩余市に泊まり、朝一番の汽車だと乗り換えもなくよかつたのだが、一〇時に支店の三十五日の骨納めがあるので行く。終わって、伊藤忠さんから上海の話などを聞く。帰りに学校を見たが立派な普請だ。農園ではリングもぎをし、六号、七号一〇貫を渡す。

▼一〇月一一日

起床七時、今日も朝から曇天、時々雨が降る。農園ではリングもぎが忙しい。朝、散歩する。学校前では植木屋が来て手入れをしているが、立派な庭だ。落成式もあと四日後に迫った。さぞ賑やかならん。正午頃余市から電話が来る。妻が末広丸に乗ったとのことだ。ずい分早く帰って来たものだ。二時頃子供等が浜へ迎えに行く。深川での話をいろいろと聞く。悦三は家に帰っ

て来て大喜びだ。今日の寒さは急に冬になったみたいだ。時々アラレが降る。

▼一〇月一二日

起床七時、日増しに寒さが加わり、吹く風が身にしみるようだ。外套がほしい寒さだ。店も火鉢が必要になった。積丹からおたまさんとみさおさんが、東京へ出るのに美国まで歩いて来て、美国から船に乗るのだという。妻はリングを持って保木回漕店へ行き、本船まで行ったが乗っていかなかったという。確かめたら午後の船だったので、また出かけて行つて届けることができた。父も体の調子がいいと言つて農園へ行く。

▼一〇月一三日

起床七時、海も静かで天気も良い。積丹から来ていた沢さんの船も、ようやく今日八日ぶりで出帆した。午前中、久しぶりで農園へ行く。一五日の品評会に出品するリングを見に行く。見回つたが余り良いのがないが、ようやく一九号、四八号、四九号、六号、旭を出品することにす。新築の学校を見る。落成式場は万国旗を張り、中はきれいに飾りつけをしている。共栄丸

が来る。小樽で買った夏外套、シヤツなどが着いた。明日、道庁長官夫人が愛国婦人会総会に臨席されるとのこと、会員等が出迎えに出るとのこと。

▼一〇月一四日

起床七時、大謀はマクロが沢山獲れたそうだが、コレラのため、東京を始め各地へ輸送できないので値段は大暴落。一〇貫一四、五円とのことだ。午前一時頃、小樽田店員が来てしばらく話をする。その後、農園へリングを見に行く。出面三人を入れて、古いリングの樹を切っている。一時半頃、富丸で宮尾長官夫人がお出でになり、愛国婦人会員が浜へ出迎える。夫人は吉井旅館に泊まられた。

▼一〇月一五日

今日は古平小学校増築落成祝賀会当日だ。それに処女会、愛国婦人会総会もある。妻は二時頃に起きて髪結さんへ行く。浜町には一軒しかないのだから、こんな時は不便だ。四時頃帰つて来たが混んでたそう。八時頃、妻は紋付きの盛装で出かけた。婦人会員は一三〇人余りいるが、皆盛装して集まるという、こんな

会合は古平では珍しいことだ。父も一時頃落成式に行く。私は留守番、幌武意大謀から、中アバ縄一〇丸買いに来る。三時頃、子供等が記念祝賀の餅を買つて帰つて来る。妻や父も四時頃に帰つて来る。リング品評会もあるが、留守番では行かれぬ。六時頃から生徒等のちようちん行列があり、町は賑やかだ。宮尾長官夫人は二時の船で帰られた。

▼一〇月一六日

天気の良い日は、父も気分が良いと言つて朝早くから起きている。午前中、自転車で新地方面を廻る。昨日あたりからブリ大漁。沖村大謀では千尾以上も揚がつたとのことだ。農園にある桐の木を欲しいという客が何人も来る。

▼一〇月一七日

天気快晴 新嘗祭（にいあきまつり）現在の勤労感謝の日）には珍しい好天気だ。どこもイモ掘りやリングもぎで忙しい。大阪から来ていたおじさんが、富丸で出発するので浜まで見送りする。妻と父は農園行き。桐は三三〇円で西川に売ることにした。午後

四時、アトマイへ貸しの請求に出かける。秋の日は短く、港町では電灯がついていた。アトマイに着く頃はもう日暮れであった。本人は留守だったが妻がいて、先日、一五円持参したはずだと言うが、店の方には一文も入っていない。まったくあきれた話だ。いろいろ話をし七時頃帰る。帰途、丸山町辺りにも寄つたが、皆、困る困るというばかりだ。実際に貸しはもうこりこりだ。越中屋で一時間程話をし、九時過ぎ家に帰る。海はナギ、空には星が輝いている。

▼一〇月一八日

今日も快晴 秋始末にはよい。イモ掘りやリング運びなどで忙しい。今日で七日間快晴が続いている。大謀ではこの頃ブリが獲れているとのこと。今日は暖かく小春日和であった。電気会社の中井さんが岩内へ転任になり、今朝の船で出発するので浜まで見送りする。本陣の浜では川崎船四、五隻が入港し、箱詰めやバラのリングを積み込んでいる。丸山に近いところでは、三千トン級の汽船が入港してブリを積み込んでいる。（続く）

心に残るもの

大 澤 文 子

なんとなく紙面にペンを走らせていた文字、秋：晩秋：この頃になると日めくりを繰るのも早い。北国の主婦たちは慌ただしく忙しい。

漬けもの、野菜の貯蔵、庭木の始末等々、間もなくやってくる厳寒に備える間も惜しい。

秋の陽ざしをもう少し身体の間ずみまで浴びたかったのになアーと、誰しも思っていたであろう。ああーそんな時季、今でもなんとなく心の片隅にすつきりしない思い出がひとつ！

たしか金子藤市氏が古平町民生委員総務をしておられた頃だったと思う。

帯広市の市民会館にて北海道婦人民生委員大会が開催されたのだった。その頃、副総務だった私にぜひ出席するようにと、金子総務に指名された。

一瞬、古平町から帯広までひとりで……ちよつと不安に感じはしたが、仕事上なれば……と持ち前の気性を励まし、夫に見

送られ一人旅に出かけたものだった。不安な気持ち——それは否めない事実、だが列車の中では短歌など詠み、平生を装い出かけたものだった。

初めて足をおろす帯広の地、不安を抱えている足元を帯広の風がやさしく吹き過ぎてゆく。

地図を片手に市民会館の位置を確かめ、タクシーに乗った。帯広市の街中を眺めながらやがて市民会館会場に到着。入口には『全道婦人民生委員大会』と書かれた大きな垂れ幕が掲げられていた。

各地から代表の女性たち、自信満々の女性たちが、われ先にと会場の入口を通ってゆく。一瞬ドキッとしたが、「まあ私も代表よ」と、ひとり気負って入口を通った。

誰ひとり知る女性もなく、受付から書類を受け取り、黙々とそして素早く空いている座席に腰をおろした。

やがて開会式、市長や議会議

長、その他おえらい方の挨拶が始まった。が、ふと受付でもらった日程表などの書類をパラパラとめくっていた。

えっ！ えっ！ 何故！ その時の驚き、筆舌にたとえようもない。

『第二分科会司会大澤文子』！四角い文字が鮮明に躍っているではないか、なんで！ どうして！ ひと言の連絡もなしに、この大きな道大会に私を指名するなんて——。驚きで頭の中はもういっぱい……。

挨拶なんかは聞く耳をもたない、どうしよう？ 頭の中は真つ白。だがこんなことをしてはいられない。あと何十分かで、それぞれ女性たちは分科会場へ入るであろう、そしてこの私も……。そして第二分科会の議題を見た。

『婦人民生委員としての心がまえ』と、あるではないか。

早く平静になり、この議題の進め方を考えなければ、あせる心にひとときの考える余裕もなかった。立ち上がる女性たちのざわめきに、開会式の終わったのを知った。

それぞれ五つの分科会場に移

動するよう指示する大きな声、ああー、私も女性たちに混じって、ふらふらと第二分科会場へ向かった。

司会者の席に一輪の小菊の花が目にとまった。とたん！

「やりとげなければ……」という持ち前の気性か、驚く程度胸が座った。会場に集まった女性たちをぐるっと見渡した。

自信満々の女性たちばかり、特にしつかり者のようなひとりを書記に指名、早々に議題に入り、各地の状況について質問。それぞれ代表者だけにほとんどん発言をしてくれる。

ウーン、助かったア！ 一時間半はまたたく間に過ぎ、書記とまとめをし、午後からは各司会者の発表となり、ながうい一日の行事も終わりを告げた。

未知の各代表とも親しく、「またネ」と別れの言葉を交わし列車に乗った。あれから数十年も経ったのであろうか。

なぜ……重大な役であるはずの司会者に、ひとことでも伝えもらえなかったのだらうか。なぜ？

この文字が今でも残るのは私だけであろうか。

中彈 泣き笑いの 樺太漁場体験記 戦中 戦後

吉野 慶一郎

むなしく 訪ねて行つた先
家路につく の家も、すでに
そこは引き揚げてしまつたのか
全く無人で、「いざという時の
蓄えに……」と、預かつておい
た食料品なども跡形も無くなつ
ていて、一瞬、途方にくれる思
いでした。

ソ連が参戦したときから戦場
に早変わりした樺太には、もは
や安全なところなどなかったの
です。沖繩などでの悲惨な戦い
の状況を聞いても、それは遠く
離れたところでききことだ
と考えていましたが、樺太での
現状をよく認識し、自覚すべき
だったのです。

品物が無くなったのは残念で
したが、こうなつたからには、
せめて日本人の誰かの役に立つ
たならそれで良からうと、先ず
はあきらめがつきました。

腰を下ろしてタバコに火をつ
けると、昨日からのことが走馬
灯のように頭の中を駆けめぐり
ます。

「無条件降伏」というのはいつた
いどんなことなのか？
「あなたまかせ」と考
えれば、今の自分たち
は正にまな板のコイと
同じ運命なのです。

日本人は樺太の外に
も満州、朝鮮、台湾な
ど広い範囲にいるのだ
がどうなるのか、しか
し、今さら何を考えて
も仕方がない。「明日
は明日の風が吹く」と
開き直り、天命を待つことに

覚悟を決めました。海も空も穏
やかで、もし沖にローソク岩で
もあれば故郷の古平の風景と同
じで、ちよつぱり郷愁を誘い、

のどかに飛び交う鴉の群れを見
て、自由に羽ばたく翼をうらや
ましく覚えしました。

仕方なく空のりやカーを引い
て、ソ連機の飛来を警戒しなが
ら引き返す、活気の無い私の姿
は見る人にどう映つたことでし
よう。カウ元氣を出し元の道を
戻りましたが、それは遠い遠い
我が家までの道でした。

本土への緊 一方、町役場
急引き揚げ では警察をは

樺太当時から吉野さんが大切にしている
「ロシア人形、通称人おばさん人形」



じめ町の有志が集まって、緊急
対策を長時間にわたつて協議
した結果、先ず老人や婦女子
を優先させての緊急引き揚げで
した。そして、早速八月一八日

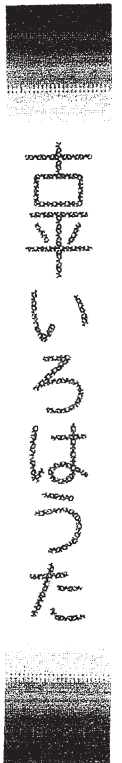
に、大泊行きの第一陣が列車
で出発することになりました。
行く人、送る人で駅頭は大混雑
となり、お互いの安否を気遣い
ながらのつらい別れとなりました。
出発した人たちは、そのま
ま大泊からの引揚船に乗ること
ができたということがわかり、
残つた人たちもひとまず安堵し
ました。

こうして、続いて翌日には第
二陣が出発、それに合わせるよ
うに漁船団も、華やかな別れの
テープに送られ稚内に向け元氣
に出港し、すべて、ことは順調
に進んでいるかに見えました。

樺太の各町村の対応は皆同じ
ようで、大泊港は引き揚げ船に
乗る人たちでこつた返し、そこ
へもつてきて、船の数も足りな
いことから混乱してしまし
た。一方、次々と上陸して来る
引揚者の列車輸送で、稚内でも
駅は大混乱を極めていたとい
うことです。

この時の引き揚げの詳細は、
すでに(一五八号、一六二号)
述べましたので略します。

(続く)



すけそ漁 吹雪の浜に大漁旗

古平のすけそ漁

■鯨に替わるものは？

明治の頃には道南地方ではす

でに鯨が去りましたが、後志沿岸では押し寄せる鯨で浜は沸き、地域の繁栄を支えていました。しかし、昭和になると積丹半島沿岸にも凶・不漁が襲い、鯨に替わる漁業を起こすことが大きな課題になってきました。

■古平のすけそ漁の始まり

古平では鰯漁が盛んで、これまでもすけそが鰯に混じって揚がることはありましたが、いぜん鯨漁への期待は大きく、外には鰯・かれい・まぐろ・ぶりなどがこれに次いでいました。

大正一二年、新地町で海産商をしていた藤沢商店が、当時、すでにかなりの漁獲を挙げていた岩内のすけそ漁を見て、試験

的に延縄(はなわ)で操業しましたが、技術や経験が乏しかったことから結果が思わしくなく、一年で止めてしまいました。

その翌年頃、岩内から大榎玉造が川崎船に漁具を積んで来て、岩内での漁法を取り入れてすけそ漁を始めたのです。

鯨漁の将来への不安や、岩内方面からすけそ漁業者が移住して来て好成績を挙げたこと、販売ルートが広がったことなどから、次第にすけそ漁を手がける者が出てきました。

大正一三年、鰯釣りをしていた吉井市松が刺網を使って試験操業しましたが、予期した結果は得られませんでした。

大正一五年、タモギタイの開拓に入った松田力三郎がすけそ漁に転向し、川崎船に電気チャッカー発動機を取り付けました

が、馬力の小さいことやトラブルが多く、その後、細野末吉、大地与市らは川崎船に焼玉エンジンを取り付けました。

■組合を設立する

すけそ漁を始める者も増えてきたことから、昭和二年末、すけそ漁業者が集まって、古平町発動機船助宗漁業組を設立しました。組合員は二名で、組合長に吉野金治を選び、組合長宅を事務所としました。

設立時の組合員

- 市吉井市松 吉吉野金治
- 半大地与市 田清水芳蔵
- ① 八幡亀太郎 三細野末吉
- ② 岩崎兼吉 岸松田力三郎
- ワ渡辺乙治 ⑤ 小林五太郎
- ⑥ 須貝松吉 ⑦ 柏木大次郎



特に昭和三年、初めて体験する程の鯨の凶漁にあい、すけそ漁に進出する者が一気に増えました。

また、函館から高山某が来て、チヨベタン川を利用してメソタイ(明太・明太魚)を製造し、古平の漁業者にもその指導に当たったとあります。

■すけその漁獲高

昭和三年以前の統計は鰯に含まれていましたが、同四年は次のようでした。



↑戦後、盛漁期のすけそはずし、妻(め)を着けている珍しい時代風景



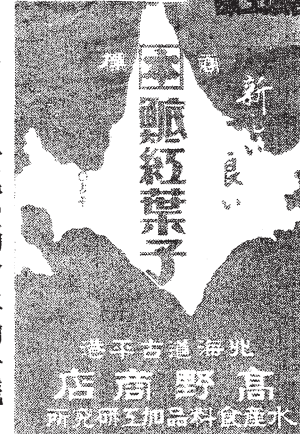
着業船 四三隻(動力・無動力)
漁獲量 五一四・九七九貫
(約一九三〇ト)
明太 六・五三(三)
(二欄八〇〇尾)

この金額は鯨の不漁もありましたが、町の漁業生産高の約二一パーセントにもなり、すけそ漁は古平の漁業の主要な地位を占めるようになりました。古平沖の漁場は発動機船で三〇分程も走った場所で、刺網一五把でほぼ満船になり、一日二往復する程の好漁でした。

この頃になると次第に動力船も多くなり、大谷留蔵は一六トという当時としては大型船を使って漁を始めました。

当時のすけそ漁船員などの給料は次のようでした。

延縄はき 月給二〇円
一般漁船員 同 一五円
加工場男工 同 一二円
同 女工 日給三〇・三五銭



↑ 味つけしたメンタイをローラーがけにした製品(港町・吉野商店)
紅葉子(浜町・高野商店)

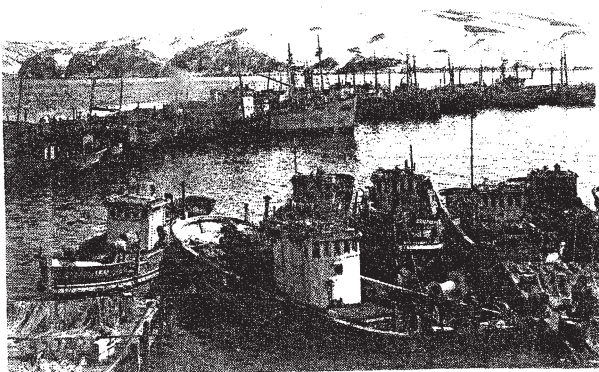
■道南からの集団操業

これまで好漁だった道南方面のすけそ漁が次第に不振になり、昭和四年、乙部村から信徳丸が一隻で古平に来港し操業を始めましたが、その結果が良かったことから、翌年には再び乙部村の漁船が一二隻の船団を組んで来港しました。

五、六トの船で、八馬力程度の焼玉エンジンを付け、地元の漁業経営者と雇用契約を結んでの操業でした。この集団操業は昭和一七年頃まで続いたといえます。

■船入潤の完成

鯨漁の衰退がはつきりしてきて、発動機船による沖合い漁業が盛んになってきた昭和五年、



懸案であった船入潤工事が着工になり同八年に完成しました。

これによって、すけそ漁を主とした沖合い漁業は急速に発展の途をたどることになります。

■信用組合が漁船を建造

船入潤の完成に加えて、さらにすけそ漁の発展に貢献したのが、信用組合による組合員への漁船の貸与でした。

昭和八年から組合の拡充計画により、計一〇隻の漁船を建造し組合員に貸与しましたが、こゝろ昭和二十年代末頃、港内に停泊する漁船群

これは古平のすけそ漁にとつての強固な基盤となりました。

また信用組合では、成績の良かった船を表彰した外、すけその子百樽ごとに祝儀も出したそうです。

■花形となったすけその子
すけそ漁の始まった頃は、メンタイの製造だけが目的でしたが、東京や大阪方面ではすけその子の塩蔵が珍重されるようになり、先進地ではその塩蔵が盛んで、メンタイよりも遥かに高価で取り引きされていました。

しかし、昭和初期の頃の古平ではまだ加工技術が未熟でしたので、先進地から技術を導入することに努め、加工場も建てられました。

すけそ業者は、すけその子と肝油の売り上げでほぼ経費が清算でき、メンタイの売り上げがそつくり利益になったと言います。

以前だと見向きもされなかった下級魚のすけそが、ここにきて全く思いがけない『金の卵』に替わってしまったというわけです。

ラッパ終業兵を命ず(続く)
中川教官から、三人の教育係の紹介があつた。岩崎上等兵、新保上等兵、佐々木一等兵の三人だが、岩崎上等兵のラッパは最高であつた。音色がきれいで、強弱を入れた情感のこもった吹奏法である。

演歌というなら、さしずめ北島三郎とでもいうところか、聞いていてうっとりするようなすばらしい演奏である。

教育の方は、学科とラッパの吹奏技術となつていて、両方ともなかなか大変なものである。

学科は陸軍ラッパ教範を使用して、ラッパ手の目的とその任務、ラッパの各部の名称、ラッパの楽譜の解説、楽譜の読み方などがあり、これが最終のラッパ手の学科筆記試験に出るので、おろそかにできない。

ラッパの吹奏法は、まず、「ド・ソ・ド・ミ・ソ」の音階を、全員が吹けるまで徹

底的にやらされる。音階の最後のソの音が高音なので、これが皆なかなかできない。私は小学校のときにやっているので案にできるが、ほかの人は大分苦労しているようだ。

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

(13)

橘 義 春

考えてみると、この

五つの音階がラッパの基本なのだから、この基本の音階が吹けなければ曲を吹くことができないわけで、連日の猛練習のおかげでなんとかできるようになった。

次は音階

から、音符によるさらに高度な吹き方の猛練習が続ぎ、皆の唇が破れて血が出るが休ませてくれない。ラッパから血の混じった唾液が流れ出てくる。朝起き

ると唇が腫れ上り、破れたところにかさぶたが出来る。それでまた一日中吹くので、かさぶたがはがれ血が吹き出してくる。皆痛くて顔をしかめながら吹いている。自ら厳しい道を選んだのだ。弱音は吐くまいと心に決める。

この難行苦行も、二週間ぐらい過ぎるといつの間にか唇の腫れもなおり、平常に吹けるようになった。やっと皆の唇がなおった頃に中川教官が、

「どうだ、唇がなおったか。ラッパ手は皆同じような苦しい道を歩んで、やっと一人前のラッパ手になれるんだ」と、言われた。教官もかつては俺達と同じような辛い思いをしてこられたのだ。修業というのは苦しく辛いものなのだ。

これが終わると、音符の読み方の教育である。ラッパには『日課号音』『情報伝達』『敬礼』『行進曲』の四つがある。

この中で、兵隊達の士気を鼓舞するのは何と言っても『行進曲』であろう。

「速足行進曲」は、主に観兵式

や軍旗祭の分列行進に吹奏されるが、行進曲は一〇曲ぐらいある。その中で「月寒行進曲」が一番の名曲だと思う。これは札幌の月寒連隊で作曲されたもので、華麗で、しかも勇壮なこの曲は行進曲の中でも群を抜くものであり、私の最も好きな曲でもある。

この曲は出だしからずうっと高音の連続で、吹く方も相当の肺活量がないと息が切れてしまう。でも四〇名からのラッパ手が二交替でこの曲を吹き、出来栄のいいときは吹いていて曲に酔いしれてしまうことさえある。それ程ラッパというのは奥が深いものである。

だが問題は、行進曲全曲の楽譜を読めなくてはならないし、また、その全曲を頭の中へたたき込み暗唱していなくてはならない。

軍楽隊や楽団は譜面を見ながら演奏するが、ラッパ手はそうはいかない。俺は駄目だとか、出来ないなんてことは軍隊では通用しない。

(続く)

札幌通信第12信

ふるさとを大切に

吉 川 義 雄

「地球は青かった」宇宙飛行士が暗黒の宇宙の中にわがふるさとを、輝く青緑の球体と見たとき、そこに国境があることが不思議に思えたという。

釈尊が、わが悟りの境地を五十年の命に懸けて「仏法」を説いたのも、人種、国境にかかわりなく、永遠に続く「生命」の尊さを宇宙の立場から、その尊さを在りのままに振る舞うことをすすめるためであった。

詮じて、人間のための説法となるが、「色心不二」論(肉体と心は同一)も「依正不二」論(環境とわが生命は同一)も真理である限り、いかなる哲学者も論破は不可能であり、事実、年

と共に実証され輝きを増している。宇宙から帰った飛行士の感動の言葉は、異口同音に地球を生命体と観ているのだ。

自分の、今を生きる場所は尊

い。ひとりで生きられる人間なんていない(依正不二)。自分のエゴにとられ他人の不幸に無関心となれば、不幸はやがて自分にキバをむいてくる(色心不二)ことを知るべきであろう。

仏と言っても人間以外の何者でもない。そのことを炎暑のインドを歩き歩いて、生涯かけて実証した偉大な生命を、私たちは仏と呼び釈尊とあがめる。

ふるさと古平の、海も山も美しいその地で生まれた、自分の生命の幸運を心から喜びたい。どのような縁で私を生んでくれたのか知らないが、因と果は厳然として自分のものであり、自分が決めたものである。

宇宙から観る地球の美しさと同様に、ふるさとは遠くから観て知る、泣きたい程の美しさがある。冬の怒濤に耐え抜くローソク岩も、春の訪れを知らせる

ハゲ山の雪崩も、小川の傍に群生するカタクリの花々も、飛び交うヒワたちも、夕風の潮溜まりに遊ぶゴダツベも、ふるさとの大地は、なんと美しいハーモニを奏でてくれたことか。

恩を忘れた者に、依正不二の原則どおり手痛いシツペ返しは当然となる。人間の傲慢は、地球上のものを、すべて征服してはばからないものと思い、山を荒らし、海を掠め、地下の資源も、空気も水も、本当に枯渇するまでは信ずることができないらしい。

地球温暖化防止の必要に気づいた各国が、92年サミットでは百五十カ国以上が調印し、95年からは毎年会議が開催され、97年について「京都議定書」となつて、具体的な削減目標と手順まで決まった。

地球生命の維持にとつて、今やらなければならぬ、この重大な議定書への批准を渡っている国にロシアと米国がある。先進国を自負しているこの二か国の内、ロシアは今年になって前向きな姿勢を示したが、米国は、01年不支持を表明した。

その国が今、どんな苦痛を受けているかだろうか。多くを語る必要がない程、周知のとおりである。

正義漢よろしく、自国中心のモノの考えから、氣にくわなければ直ちに大量殺りくの兵器を、これ見よがしに使用する愚を繰り返すのを、われわれはイヤという程知った。

青い地球は病んでいる。釈尊は、いやすべての高等宗教は人を殺せとは言わないし、許可することもない。

宗教に名を借りてテロを公認しているのは、宗教を利用する人間である。太平洋戦争でも国内のすべての宗教を制圧して、「大義」に生きよと国民を駆り立て、軍部・政府は、神道をモノの見事に利用した。「義」というのであれば、人の行うべき道であり、万人の幸福と平和の実現に尽くすことである。

美しいふるさとの山河。そこで生き抜いた姿を如実に語る『高野名日記』を、今日も繰り返し読ませていただいている。そして、生活を歌う郷里の人たちの歌詞に学のは楽しい。

俳句鑑賞

新しい芽 そして力

俳誌を発行している関係で、毎日超多忙なの日程を消化しています。時には一日に二コマ三コマのスケジュールを超荒技でこなすということもあります。そんな中で今年の九月五・六日の両日は、第四回永平寺全国俳句大会が開催されたため永平寺町を訪れ、永平寺にもお詣りしお札を頂いて参りました。特に九月六日当日は俳句選者という榮譽を担い、その責を果たして来ました。

十月上旬から十一月にかけては各地で文化祭行事が盛んになります。千葉県芸術フェステバル参加俳句大会は十月十九日行われ、兼題募集に五五一名二〇〇六句の応募がありました。千葉県知事賞 県議会議長賞 県教育長賞には、

消しゴムで消せそうな髭山笑う 斉藤すす子
海を出てしばらくは月濡れてをり 増田斗志
住職に叱られている羽拔鶏 原 睦子
以上三氏の句が選ばれました。普段皆さんが作っておられる座右の俳句とはいささか趣きが

お楽しみコーナー

<12>

俳誌悠主宰 水 見 壽 男

ちがうかも知れませんが、しかし何はあれ、江戸時代から含めて俳諧・俳句の歴史は四百年余に及びます。そして時代は流れ歴史を刻みましたが、芭蕉の言葉にもありますように「俳句の基は写生である」という一節は、現代まで通じる貴重で重みのある言葉として歴史的な位置付けがなされています。

十一月五日には、流山市文化祭参加の俳句大会が開催されました。今年は新しい試みとして一般の部に加え、少年少女の部を新設し、市内十三校の小中学校に応募の案内を出しました。十月下旬の締め切りに小学生二二八名、中学生九二四名、計二二五一名、俳句は小学生二二七四句、中学生二二九六句、計二五七一一句の応募がありました。俳句大会の応募数としては驚異的な数字で、数のみならず作品の優秀さのエネルギーに圧倒される思いを強くし、流山市俳句協会の先生方の選句する姿勢にも熱が入りました。市長賞、市議会議長賞、市教育長賞を紹介します。

▽中学生の部

しもばしら住んでみたい銀の城

東部中二年 上野裕子

山の中小さな滝もたくましく

東深井中三年 伊原彩加

シャボン玉みんなの夢を運びけり

北部中三年 金垣里美

▽小学生の部

赤トンボ青いキャンパス飛んでいく

南流山小六年 佐藤静香

しもばしら足でふんだらおこつてる

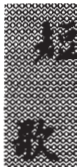
西深井小六年 大地萌子

とんでゆけ秋の空までホームラン

鰯ヶ崎小六年 国安 悠

流山は小林一茶が江戸時代にたびたび訪れ、俳人を育てる専心してくれました。

古平町と同じです。明治時代から荒木さんという俳句の宗匠が居られ、その方を源に今日の古平の俳句の流れがあります。若い人々のエネルギーは無限です。俳句を作る感覚も新鮮です。新しい力と大人の俳人の力を集約すること三倍以上の力に夢がふくらみます。古平俳句会に期待する所以です。



古平町岬短歌会

丘の上に大きき小き鳶あまた跳ね遊びをり秋空の下
穂の垂れず稔らぬ稲を刈る老は冷害を言ひ空を仰ぎぬ

池田 テル

寒き夏を嘆きぬし友この秋も米くださりぬいつものやうに
収穫の喜び言ひて来春の種揃へぬしとふ逝きにし友は

鈴木 時子

二度咲きの菊の香りのやさしくて暖かき秋花の色にも
赤トンボ今年の秋は珍らしく物干し竿にひとつ止りぬ

田中 香苗

咲き残るコスモスの花高く揺れ朝より渡る時雨にぬるる
庭の満天星火の如炎えて前山は日の差しにつつ時雨の渡る

東 美知

つややかに滴光りて雨ながら庭にもみぢ葉色濃く映ゆる
西風の速く過ぎゆく海の面に波たち舟の追はるることし

堀 典子

網おこすたまりの浮きに近づくに鴈数まし鳴きて寄り来る
雪の来る予報に急ぎ家うちに鉢もの入れて今日は暮れたり

丹後 初江



古平俳句会

雪虫の乱舞にして触合はず 斉藤 波留

爽やかや妹の曾孫の曾父似とか 山口 悦子

蔓もどき枝も嬾やか昏の径 越野 敏雄

厨窓月を私のものとせし 大和田 絵伊

米櫃を干して待たるる今年米 高橋 重子

とんねるを抜けて紅葉の又紅葉 仲谷 比呂古

松籟や干し連ねたる唐辛子 室谷 弘子

風鈴のかすかに鳴りて風渡る 外山 俊久

深き谿深き樹海や秋の声 越野 清治

幸平 吟

晩飯をすませて秋の空にかな

日没の瞬時明るき昏の秋

秋の空白雲高く動かざる

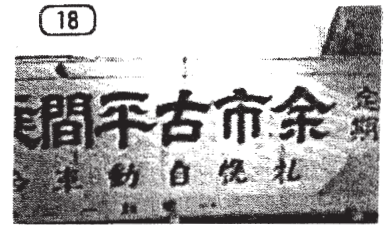


古平町史年表

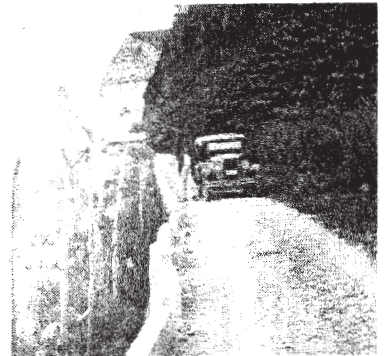
- ▲鉄道敷設法が改正され、余市・余別間33マイル(約53km)の建設費として787万8千円が追加決定される
- ▲使用不能なガソリンポンプ車を、無償で修理した消防組員二人(山本清吉・本間金三郎)に町から記念品が贈られる
- ▲山口金治が郷社琴平神社に灯笼一對(1,800円)、役場建築資金として1,000円を寄贈し道から褒状が下付される
- ▲桂の沢で雪崩があり、倒壊した家から出火して3人が焼死、2人がやけどを負う
- ▲12月末現在、古平町の人口 7,350人(男3,927・女3,423)、戸数 1,428戸 前年比 人口+315人

昭和3年(1928)

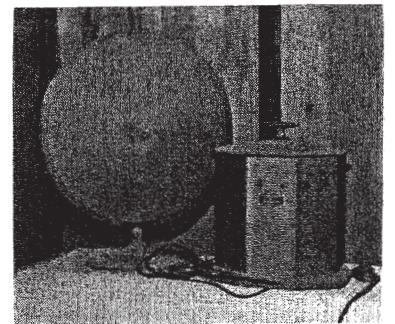
- ▲町の基本財産蓄積、罹災者救助基金条例が制定される
- ▲古平町会(古平町議会)傍聴取締規則が制定される
- ▲積丹半島鉄道漁港期成同盟会と改組し、道に漁港の早期着工を陳情する(確かな見通しが持てない鉄道敷設問題だけではなく、確実性のある漁港の建設も合わせて実現しようという住民の切実な願望があった)
- ▲水田の増加により泥の木・鴨居木方面では灌漑溝(かんがいう)組合を結成し、灌漑溝掘削の出願をする
- ▲普通選挙になって、初めての町会議員(町議会議員)選挙が行われる(普通選挙=大正14年、男子にだけ現在のような選挙権が与えられたが、女子には昭和20年12月、衆議院議員選挙法改正で初めて婦人の参政権が実現する)
- ▲札幌自動車合資会社が、余市~古平間に乗合自動車を運行する
- ▲NHK札幌放送局が開局し、古平町内でもラジオ放送を聴取できるようになる
- ▲浅岡精一町長が辞任し、米田岩吉助役が町長代理となる
- ▲種田富太郎が道会(道議会)議員に初当選する
- ▲古平町出稼労務者供給組合が結成される
- ▲古平・美国両町の連合青年団が競弁会を開く
- ▲今上天皇陛下のご即位を祝い、児童・教職員・町内各団体の外一般町民が参加して旗行列が行われる
- ▲ご大典記念地方饗餐(きょうさん)に古平町から11人が招待される
- ▲全道青年弁論大会に古平・美国町地区代表として古平町・松岡寛一が出場する
- ▲沖青勇団(沖團)が、沖小学校校庭にサクラ・イチョウを植樹する



札幌自動車(余市駅前待会所)



沖村街道のフォード車



入船町・山口金治宅で購入したアメリカ製ラジオ受信機



出稼労務者供給組合が安全を祈願し建立した十八番観音像